
Micro Focus Visual COBOL チュートリアル

COBOL 開発 : Linux/UNIX 版 リモート開発編

1. 目的

本チュートリアルは、Micro Focus Visual COBOL の Linux/UNIX が提供するリモート開発機能を学ぶためのチュートリアルです。リモート開発を利用することで、以下のメリットを享受できるようになります。

- 高機能なオープンソースの IDE（統合開発環境）として広く普及する Eclipse 上で Linux/UNIX 環境をターゲットとしたアプリケーション開発が行えるため、Linux/UNIX 環境における開発効率の向上

2. 前提

- 本チュートリアルで使用したマシン OS : Windows 11, Red Hat Enterprise Linux 8.5
- Windows 上に Visual COBOL 8.0J for Eclipse がインストール済みであること
- Micro Focus Visual COBOL 8.0J Development Hub がインストール済みであること

本チュートリアルの実施前に、「Micro Focus Visual COBOL for Eclipse チュートリアル」の実施してください。

内容

1. 目的
2. 前提
3. チュートリアル手順の概要
 - 3.1. 環境のセットアップ
 - 3.1.1. Visual COBOL for Eclipse のセットアップ
 - 3.1.2. Visual COBOL Development Hub のセットアップ
 - 3.2. Development Hub のインストール確認
 - 3.3. リモートサーバーを起動
 - 3.4. COBOL リモートプロジェクトの作成
 - 3.5. X サーバーの準備
 - 3.6. リモートデバッグ

3. チュートリアル手順の概要

3.1. 環境のセットアップ

Visual COBOL の Linux/UNIX 版の開発ライセンスは Windows にインストールして利用する Micro Focus Visual COBOL for Eclipse と Linux/UNIX 環境にインストールする Micro Focus Visual COBOL Development Hub がセットになったライセンスです。リモート開発を行うためには、両製品ともにセットアップを行う必要があります。

3.1.1. Visual COBOL for Eclipse のセットアップ

未実施の場合、「Micro Focus Visual COBOL for Eclipse チュートリアル」の内容に従ってセットアップ、および、チュートリアル内容を先に行ってください。

3.1.2. Visual COBOL Development Hub のセットアップ

- 1) 入手したインストールプログラムをターゲットの OS へファイル転送します。
- 2) リリースノートを確認し、インストール要件を満たしていることを確認します。
- 3) 転送したインストールプログラムを解凍します。
- 4) 管理者権限を持ったユーザーへ切り替えます。
- 5) 解凍したインストーラへ実行権限を与えます¹。

```
# chmod u+x setup_visualcobol_devhub_8.0_redhat_x86_64
```

- 6) インストール処理を開始します²。

```
# ./setup_visualcobol_devhub_8.0_redhat_x86_64 -installlocation=/opt/microfocus/VC80
```

```
-----
```

Micro Focus Product - Product Extractor

www.microfocus.com

～中略～

製品をインストールする前に「使用許諾契約」のコピーが必要な場合は、
同意しないで、次のコマンドでインストーラを再度実行してください：

```
./setup_visualcobol_devhub_8.0_redhat_x86_64 -EULA
```

```
使用許諾契約の条件に同意しますか? (y/n): y
```

使用許諾契約の条件を確認し、問題なければ「y」を入力します。

使用許諾契約（EULA）は製品ディレクトリの次のファイルで確認できます：

```
/opt/microfocus/VC80/etc/EULA_VCED_v8_0_jp.htm
```

¹ インストーラのファイル名は、「setup_visualcobol_devhub_8.0_<プラットフォーム名>」の形式で構成されており、x86_64 Red Hat 版以外の製品を利用される場合はこの部分が異なるため、注意してください。実行時はファイル名に合わせて適切な名前に置き換えてください。

² デフォルトのインストールディレクトリは「/opt/microfocus/VisualCOBOL」です。本例では「-installlocation=/opt/microfocus/VC80」を指定し、インストールディレクトリを変更しています

Micro Focus Visual COBOL Development Hub 8.0 の SOA サポートを構成するには、

`$COBDIR/bin/casperm.sh` を実行してください。

Micro Focus Visual COBOL Development Hub 8.0

インストールが完了しました。

使用許諾契約 (EULA) は製品ディレクトリの次のファイルで確認できます:

`/opt/microfocus/VC80/etc/EULA_VCED_v8_0.htm`

このバージョンの次の製品を使用するには :

Micro Focus Visual COBOL Development Hub 8.0

環境を設定するため、"`cobsetenv`" を実行してください。

`./opt/microfocus/VC80/bin/cobsetenv`

3.2. Development Hub のインストール確認

Visual COBOL Development Hub は本書で紹介するリモート開発機能に加えて従来の Micro Focus の COBOL 製品が提供するコマンドラインインターフェース機能も引き継いでいます。本章では前章でインストールした Visual COBOL Development Hub が正しくインストールされたことをこのコマンドラインインターフェースを使ったコンパイル及びテスト実行作業を通じて確認します。

- 1) ライセンスが未投入の場合は、インストールマニュアルに従い、ライセンスを適用します。
- 2) 一般ユーザーに戻ります。
- 3) Visual COBOL の利用に必要な環境変数を整えます。

Visual COBOL Development Hub をインストールすると Visual COBOL の利用に最低限必要な環境変数をセットアップするスクリプトが

```
<インストールディレクトリ> /bin/cobsetenv
```

に用意されます。本ステップではこのセットアップスクリプトを実行して環境変数設定をします。

```
$ ./opt/microfocus/VC80/bin/cobsetenv
COBDIR set to /opt/microfocus/VC80
$
```

このスクリプトにより設定される主な環境変数を下記に記します。

> COBDIR	製品のベースディレクトリ(インストールディレクトリ)
> PATH	\$COBDIR/bin
> ライブラリ探索パス ³	\$COBDIR/lib

- 4) 製品同梱サンプルをコピーします。

Visual COBOL Development Hub をインストールすると \$COBDIR/demo ディレクトリ配下にサンプルプログラム及びビルドスクリプトがカテゴリ分けされて配置されます。ここでは、このサンプル中における簡単なコンソールアプリケーションプログラムをワークディレクトリにコピーします。

```
$ cp -p $COBDIR/demo/cobol/tictac/*.cbl ./
$ ls
tictac.cbl
```

- 5) コピーしたプログラムを実行形式にコンパイルします。

Visual COBOL は COBOL プログラムを実行形式、ライブラリファイル、呼び出し可能な共有オブジェクト、動的ロードモジュール等、目的に応じて適切な形式にビルドする機能を持っています。ここでは、コピーしたサンプルプログラムを実行形式ファイルシングルステップでビルドします。下記のコマンド実行結果からわかるように、この 1 つのコマンドにより、中間コード、オブジェクトコードの生成並びに実行形式へのリンクが処理されていることがわかります。

```
$ cob -x tictac.cbl
$ ls
tictac  tictac.cbl  tictac.idy  tictac.int  tictac.o
```



³ LD_LIBRARY_PATH, LIBPATH, SHLIB_PATH 等、プラットフォームによって環境変数名は異なります。

6) ビルドしたアプリケーションをテスト実行します。

Visual COBOL Development Hub にはテスト実行機能が装備されており、コンパイル・ビルドしたモジュールを同環境上でテスト実行することが可能です。ここではこの機能を使って、生成した実行形式のプログラムをテスト実行してみます。tictac は○×ゲームのロジックを COBOL で組み上げたものとなります。プロンプトに従って○×ゲームを進めてみてください。

【実行イメージ】

① 実行形式を実行

```
$ ./tictac
To select a square type a number between 1 and 9
Shall I start ?
```

② 先攻/後攻を選択、本例では player が先攻となるよう選択

```
Shall I start ? n
```

③ ゲーム画面に切り替わるので、フィールドを選択してゲームを実行

```
To select a square type a number between 1 and 9
Please select an empty square 0

          7|   8|   9
          |   |
          |   |
-----+-----+-----
          4|   5|   6
          |   |
          |   |
-----+-----+-----
          1|   2|   3
          |   |
          |   |
```

7) ゲーム終了後、アプリケーションの終了を選択

```
To select a square type a number between 1 and 9
stalemate
Play again ? n
```

3.3. リモートサーバーを起動

リモート開発は実際の操作対象が Linux/UNIX 側にあるにもかかわらず Windows 上の Eclipse にてあたかもローカルのソースをコーディング編集やデバッグするかのようにして操作させることを可能にする技術です。このリモート開発を実行するにあたり、Linux/UNIX 側では Windows からの操作要求を受け付けるためのリモートサーバーを起動する必要があります。

Linux/UNIX と Windows の間の接続には、Eclipse が提供する RSE(Remote System Explorer) フレームワーク、もしくは SAMBA や NFS のようなネットワークファイルシステムが利用できます。ここではパフォーマンスの観点で有利な RSE で接続してみます。この RSE についてもプロジェクトのポリシー（管理者権限を持ったユーザーの利用制限、ファイアウォール等）に応じて柔軟に対応できるよう、デーモンを使って接続を自動確立させる方法並びに SSH でマニュアル接続させる方法を用意しています。本章では、デーモンによる自動接続を使った方法を紹介します。

- 1) 管理者権限を持ったユーザーに切り替えます。
- 2) ユーザーローケルを SJIS に設定します。
- 3) Visual COBOL の利用に必要な環境変数を整えます⁴。

```
# ./opt/microfocus/VC80/bin/cobsetenv  
COBDIR set to /opt/microfocus/VC80
```

- 4) デーモンを起動します⁵。

```
# $COBDIR/remotedev/startrdodaemon  
Starting RSE daemon...  
Daemon running on: localhost.localdomain, port: 4075
```

⁴ OS によっては、su コマンドの実行時にライブラリ探索パスをクリアするものもあるようです。前章で設定した環境変数が正しく引き継がれている場合は不要です。

⁵ デフォルトでは、4075 ポートはデーモンに、ランダムな 5 桁のポートについては各 Windows との通信用に割り当てます。これらのポートがファイアウォール等により閉じている場合は、

`$COBDIR/remotedev/startrdodaemon <デーモンのポート番号> <Windows との通信ポート範囲>`
のような形式で任意のポートへ割り当てることも可能です。

COBOL 開発：Linux/UNIX 版 リモート開発編

3.4. COBOL リモートプロジェクトの作成

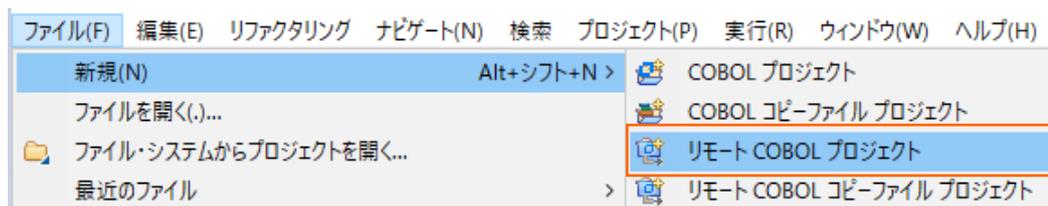
前章にて Linux/UNIX 環境側で Windows と通信するための準備作業が完了しました。ここからは、Windows 上にインストールされた Visual COBOL for Eclipse を使って Linux/UNIX 環境上に直接 COBOL アプリケーションをビルド生成してみます。アプリケーションのリソースは事前学習で利用した「Micro Focus Visual COBOL for Eclipse チュートリアル」で用意したものを利用します。

1) Visual COBOL for Eclipse を起動します。

ワークスペースの指定は特にありません。

2) COBOL リモート プロジェクトを作成します。

① [ファイル(F)] メニューから [新規(N)] > [リモート COBOL プロジェクト] を選択します。



② [プロジェクト名] 欄に任意のプロジェクト名を指定し、[次へ(N)] ボタンをクリックします。

[ファイル システムを選択]は「リモートファイルシステム(RSE)」を選んでおきます。

リモート COBOL プロジェクト

ワークスペースまたは外部にリモート COBOL プロジェクトを作成



プロジェクト名: RemoteProject

ファイル システム
 ファイル システムを選択: リモート ファイル システム (RSE)

リモートファイル システムの場合、RSE サポートによりリモート プロジェクトで作業できます。ローカル ファイル システムの場所の指定は不要で、リモートマシン上の場所の指定だけが必要です。

ネットワーク ファイル システムの場合は、ローカルマシン上のプロジェクトの場所(マップされたドライブ上のプロジェクトパス)とリモートマシン上のパスを指定する必要があります。

Buttons: ? < 戻る(B) **次へ(N) >** 終了(E) キャンセル

- ③ プロジェクトテンプレートは [Micro Focus テンプレート[64 ビット]] を選択し [次へ(N)] ボタンをクリックします。

リモート COBOL プロジェクト
ワークスペースまたは外部にリモート COBOL プロジェクトを作成

プロジェクトテンプレートを選択

- Micro Focus テンプレート [32 ビット]
- Micro Focus テンプレート [64 ビット]

[テンプレートの設定を構成...](#)

テンプレートの参照

場所:

ファイルシステムを選択: default

- ④ [接続の新規作成] ボタンをクリックします。

リモート COBOL プロジェクト
ワークスペースまたは外部にリモート COBOL プロジェクトを作成

プロジェクト名: RemoteProject

リモート設定

接続名:

リモート:

リモートの場所はリモートマシンのプロジェクトパスに設定しなければいけません。

- ⑤ [Micro Focus DevHub(RSE 経由)] を選択し、[次へ(N)] ボタンをクリックします。

リモート・システム・タイプの選択
Micro Focus DevHub - SSH プロトコルによるリモートファイルシステム(RSE)のファイルアクセス

システム・タイプ:
フィルタ入力

- 一般
 - Micro Focus DevHub (RSE 経由)
 - Micro Focus DevHub SSH 使用

- ⑥ Windows 側にて Linux/UNIX サーバーの名前解決できるのであれば [ホスト名] 欄にそのホスト名を入力します。名前解決できない場合は、[ホスト名] 欄にはそのサーバーの IP アドレスを指定します。[接続名] 欄は自動で [ホスト名] 欄の値がコピーされます。指定が終わりましたら [終了(F)] ボタンをクリックします。

リモート1 システム接続(Micro Focus DevHub (RSE 経由))
接続情報の定義

親プロファイル:

ホスト名:

接続名:

記述/説明:

ホスト名を検証
[プロキシ設定を構成](#)

- ⑦ [参照...] ボタンをクリックします。

リモート COBOL プロジェクト
ワークスペースまたは外部にリモート COBOL プロジェクトを作成

プロジェクト名: RemoteProject

リモート設定

接続名:

リモート:

リモートの場所はリモートマシンのプロジェクトパスに設定しなければいけません。

- ⑧ [マイ・ホーム] の左の展開アイコンをクリックします。

フォルダーの選択

マイ・ホーム

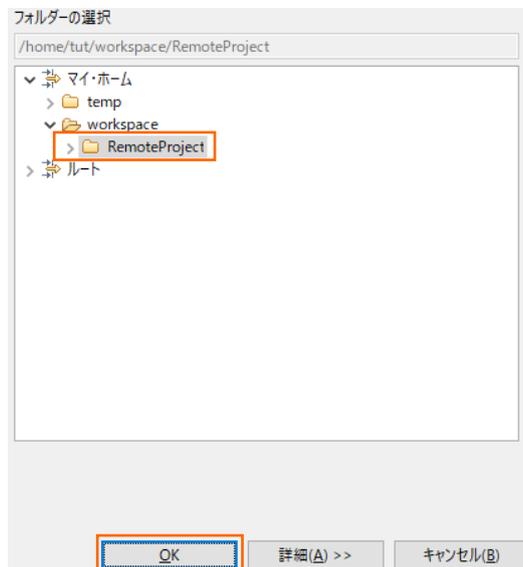
> マイ・ホーム

> ルート

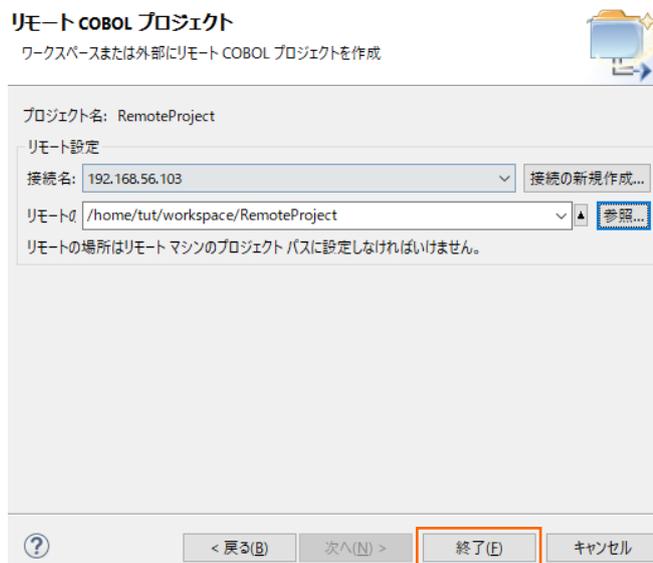
- ⑨ Linux/UNIX 側で利用する一般ユーザーの認証情報を [ユーザー ID] 欄及び [パスワード] 欄に入力します。
[パスワードを保管(C)] にチェックを入れ、[OK] ボタンをクリックします。



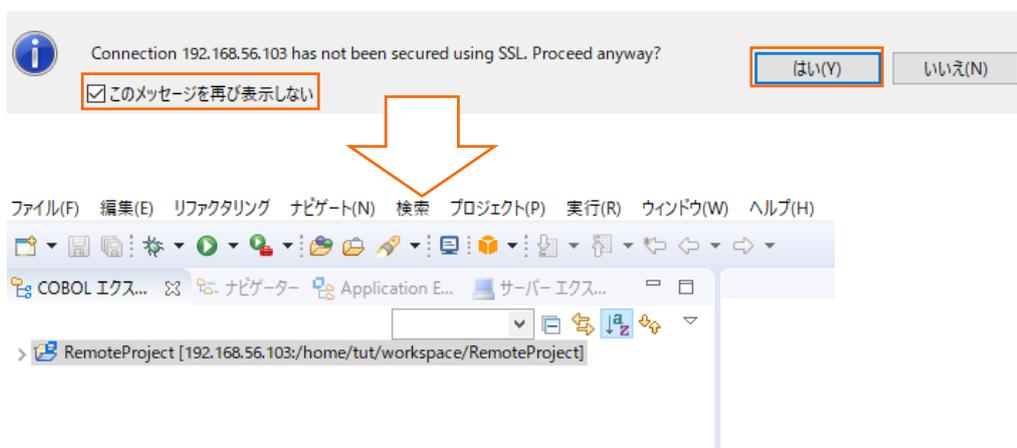
- ⑩ いくつかワーニングダイアログが表示されることがあります。その場合、すべての応答に [はい(Y)] をクリックします。
⑪ Linux/UNIX 側でソースや生成されるモジュール等を格納するプロジェクトディレクトリとして利用するディレクトリをツリーで選択し、[OK] ボタンをクリックします。



- ⑫ [終了(F)] ボタンをクリックします。

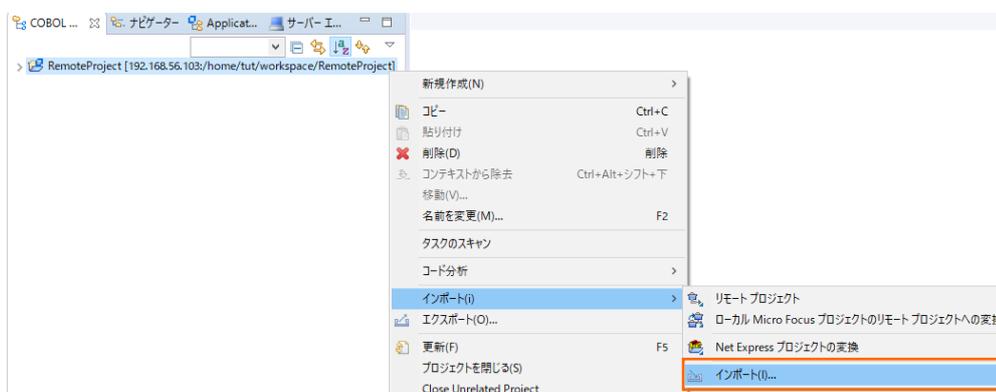


- ⑬ 下記ダイアログが表示された場合、[このメッセージを再び表示しない] にチェックをいれ、[はい(Y)] を選択します。

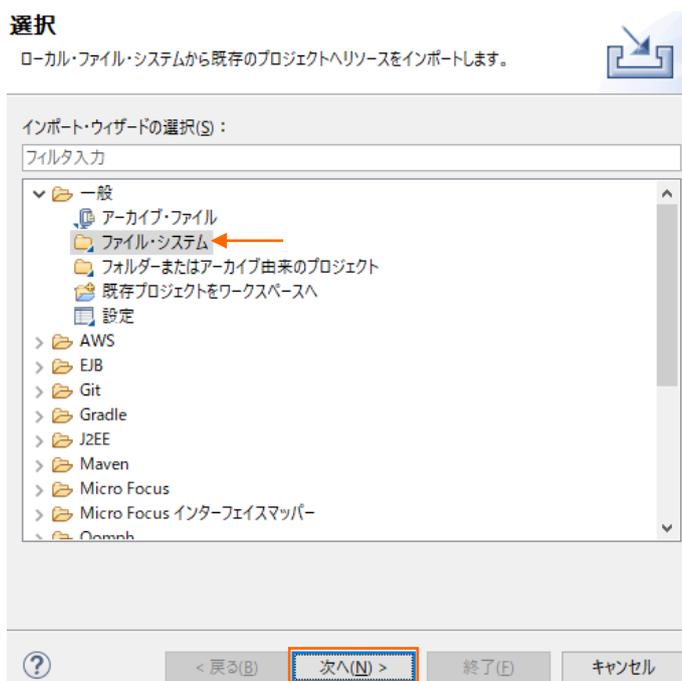


- 3) プロジェクトにリソースを追加します。

- ① プロジェクトを右クリックし、[インポート(I)] > [インポート(I)] を選択します。



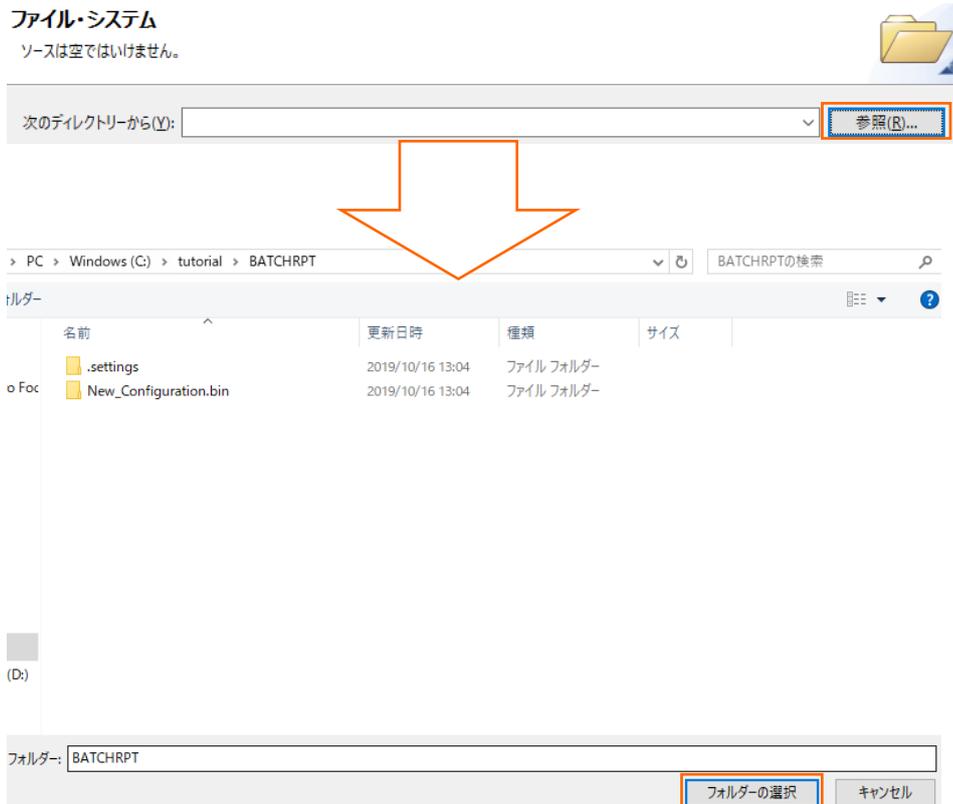
- ② [一般] > [ファイル・システム] を選択し [次へ(N)] ボタンをクリックします。



- ③ [参照(R)] ボタンをクリックし、ポップアップするエクスプローラにて「Micro Focus Visual COBOL for Eclipse 自習書」で作成した [BATCHRPT] プロジェクトフォルダを選択し [フォルダーの選択] ボタンをクリックします。

ファイル・システム

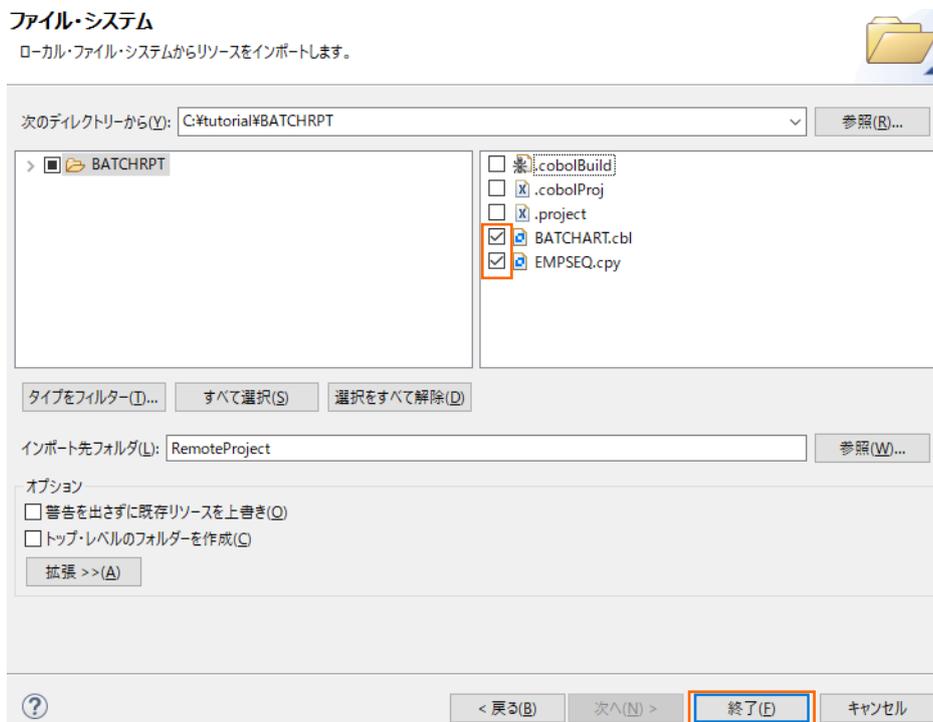
ソースは空ではありません。



- ④ [BATCHRPT.cbl] 及び [EMPSEQ.cpy] にチェックを入れ、[終了(F)] ボタンをクリックします。

ファイル・システム

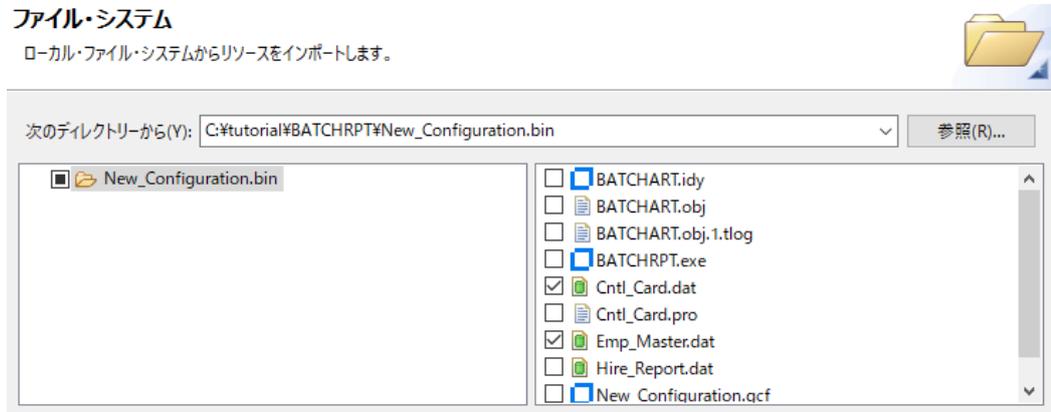
ローカル・ファイル・システムからリソースをインポートします。



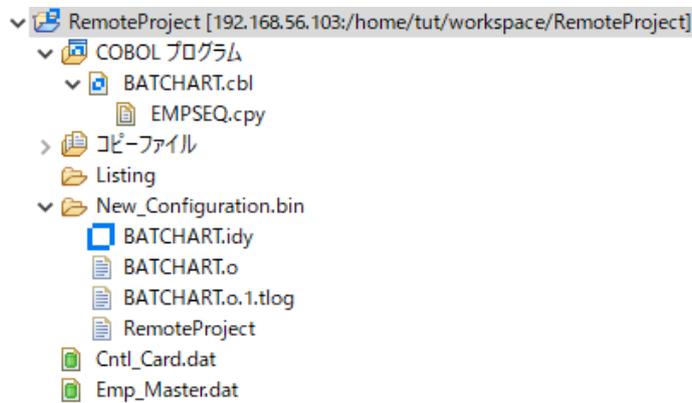
- ⑤ ③、④の要領で [Cntl_Card.dat] 及び [Emp_Master.dat] も BATCHRPT のプロジェクトフォルダ配下の New_Configuration.bin
- ⑥ フォルダ下から COBOL リモートプロジェクトに追加します

ファイル・システム

ローカル・ファイル・システムからリソースをインポートします。



【リソース追加後のプロジェクトストラクチャーイメージ】



4) プロジェクト構成を設定します。

- ① COBOL エクスプローラにてプロジェクトを右クリックし、[プロパティ(R)] を選択します。
- ② [Micro Focus] > [ビルド構成] > [リンク] へとナビゲートします。
- ③ リンク設定を確認します。

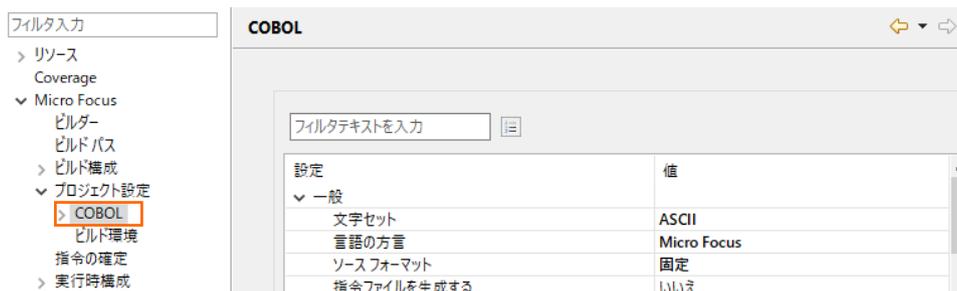
モジュール名はプロジェクトと同名となります。

プロジェクト中の COBOL プログラムを1つの実行形式に固めたモジュールが生成されます。

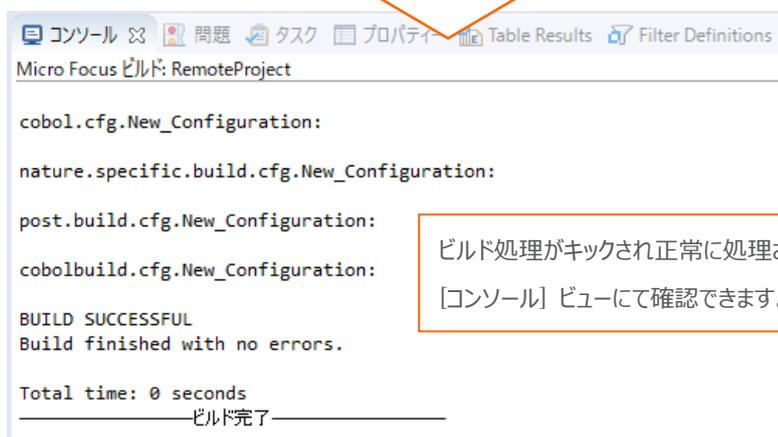
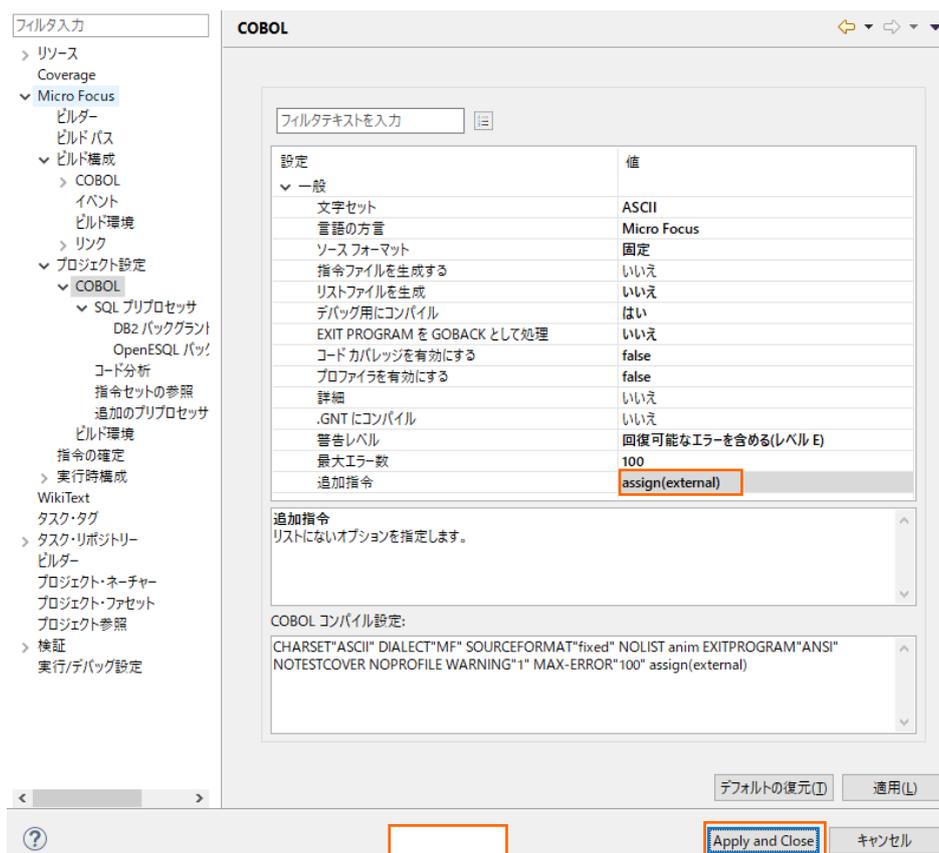
64-bit モジュールが生成されます。

設定	値
Linkage	
出力の名前	RemoteProject
出力パス	New Configuration.bin
エンリポイント	
ターゲットの種類	単一実行可能ファイル
ビット数	64ビット
JLBR にパッケージ化	いいえ
マルチスレッド	いいえ

- ④ [Micro Focus] > [プロジェクト設定] > [COBOL] へとナビゲートします。



- ⑤ [追加指令] 欄に「ASSIGN(EXTERNAL)」を入力し [Apply and Close] ボタンをクリックします。



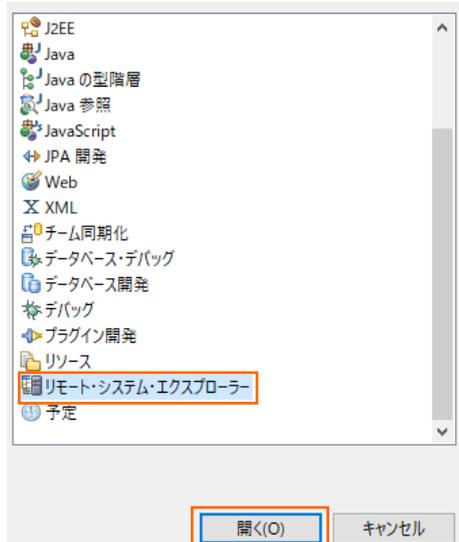
ビルド処理がキックされ正常に処理されたことを
[コンソール] ビューにて確認できます。

5) Linux/UNIX 上にリソースが生成されたことを確認します。

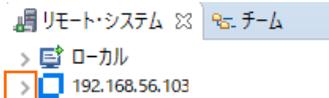
- ① 画面右上の [パースペクティブを開く] アイコンをクリックします。



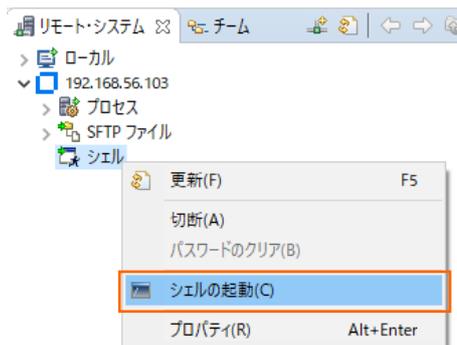
- ② [リモート・システム・エクスプローラー] を選択し、[開く(O)] ボタンをクリックします



- ③ [リモート・システム] ビューにて、プロジェクトを作成する際に作成した接続を展開します。



- ④ [シェル]を右クリックし、[シェルの起動(C)] を選択します。



- ⑤ プロジェクトディレクトリとして用意したディレクトリの中身を確認します。

```

/home/tut/workspace/RemoteProject>
ls -R
.:
├── BATCHART.cb1
├── Cntl1_Card.dat
├── EMPSEQ.cpy
├── Emp_Master.dat
├── Listing
├── New_Configuration.bin
├── ./Listing:
├── ./New_Configuration.bin:
│   ├── BATCHART.idy
│   ├── BATCHART.o
│   └── BATCHART.o.1.tlog
└── RemoteProject
  
```

COBOL エクスプローラの表示が実際の Linux/UNIX 上のファイルシステム上の内容と同期がとれていることが確認できます。

- ⑥ 画面右上の COBOL パースペクティブのアイコンをクリックしてパースペクティブを COBOL に戻します。



3.5. X サーバーの準備

リモート開発でデバッグする際、ACCEPT 文や DISPLAY 文によるコンソール入出力は X Window の技術を用いて、Windows 側に表示させます。そのため、リモート開発にてデバッグ／テスト実行する際は、Windows 側で X サーバーを起動する必要があります。そのため Micro Focus Reflection Desktop for X という X サーバーも併せて配備する必要があります。Windows 端末上に既に他の X サーバースoftwareをインストールしていればそれを利用することも可能です。未インストールの場合はこの Micro Focus Reflection Desktop for X をインストールしてリモート開発時に利用してください。

Micro Focus Reflection Desktop for X のインストーラはリリースノートに記載されておりますのでそちらを参照してください。

※「[VcXsrv](#)」と呼ばれる無償の X サーバースoftwareも市場にあるのでそれを使うことも可能です。

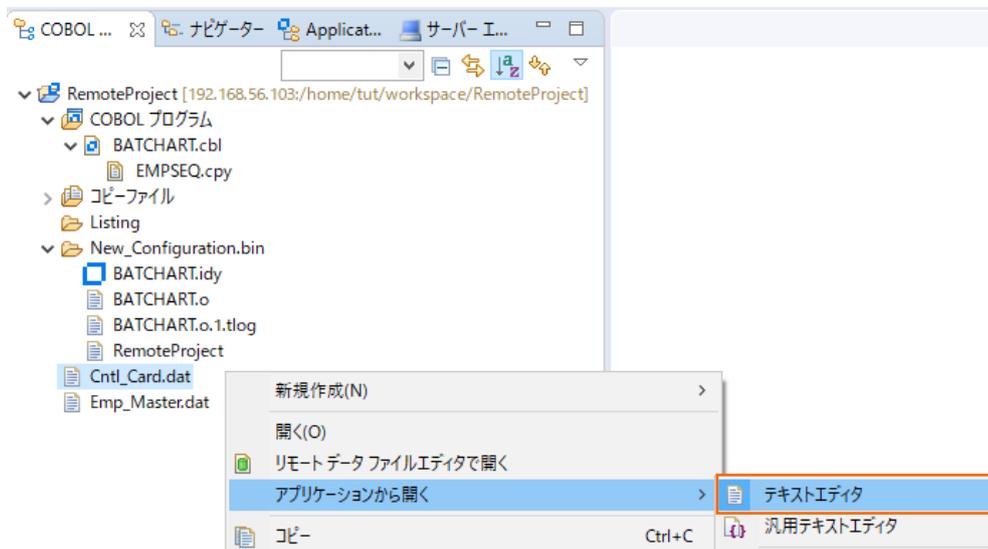
3.6. リモートデバッグ

ここまでの作業にて、Windows 上の Eclipse プロジェクトから直接 Linux/UNIX 側の実行形式を生成させました。本章ではこの生成されたモジュールを Linux/UNIX 上で実行させつつも Windows 上のデバッガでその処理を操作してみます。

- 1) Visual COBOL for Eclipse が閉じている場合は、起動し 3.4 で使用した Eclipse ワークスペースを開きます。
- 2) ご使用になる X サーバーを起動します。
- 3) 制御ファイルのメンテナンスをします。

「Micro Focus Visual COBOL for Eclipse 自習書」では最終的に該当する社員情報が見つからなくなるようメンテナンスしました。ここでは初期値に戻し検索条件を有効にします。

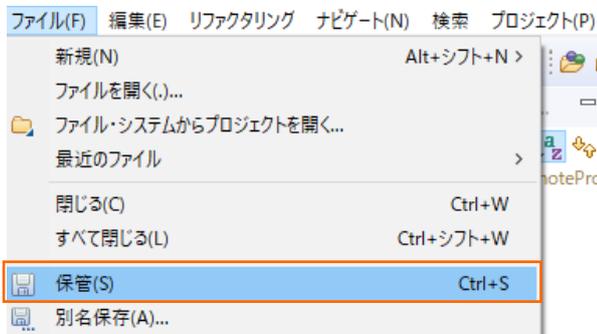
- ① COBOL エクスプローラにて [Cntl_Card.dat] を右クリックし、[アプリケーションから開く] > [テキストエディタ] を選択します。



- ② 「20110101」に変更します。



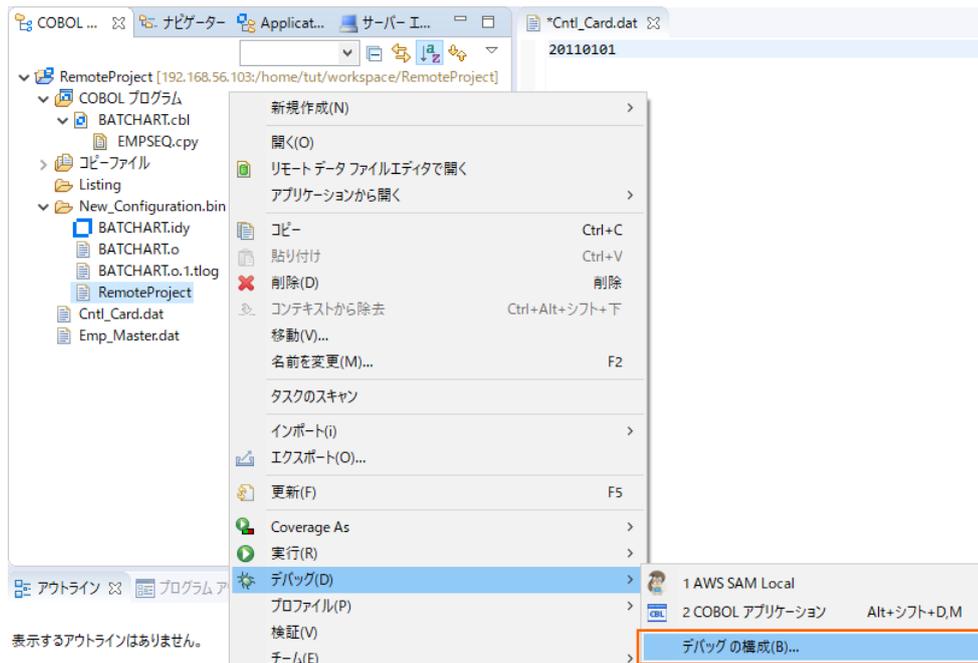
- ③ [ファイル(F)] メニューから [保管(S)] を選択し変更を保存します。



- 4) デバッグの構成の各種設定項目を指定します。

- ① COBOL エクスプローラにて [New_Configuration] 配下に生成されているプロジェクトと同名の実行形式を右クリ

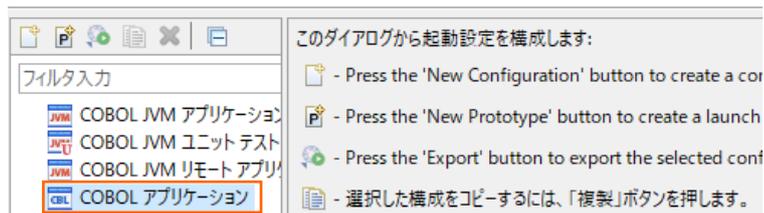
ックし [デバッグ(D)] > [デバッグの構成(B)] を選択します。



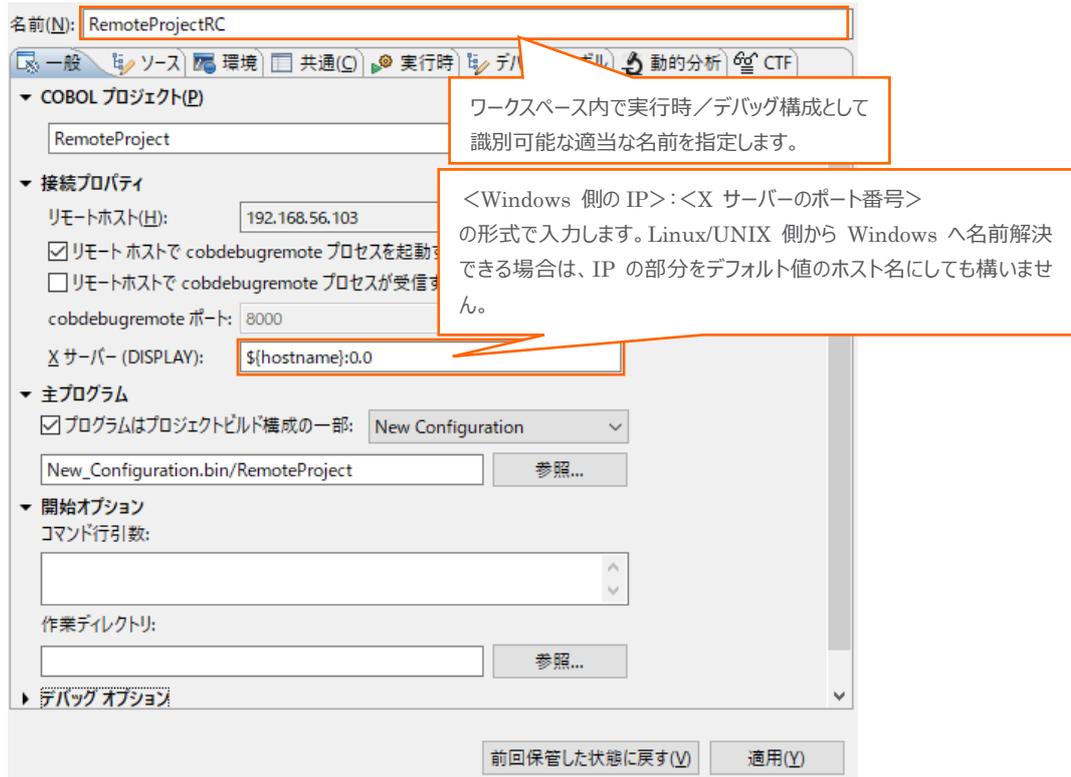
- ② [COBOL アプリケーション] をダブルクリックします。

構成の作成、管理、および実行

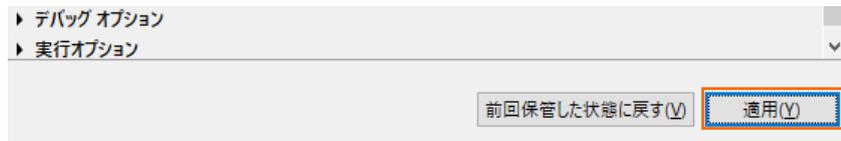
COBOL プログラムをデバッグします



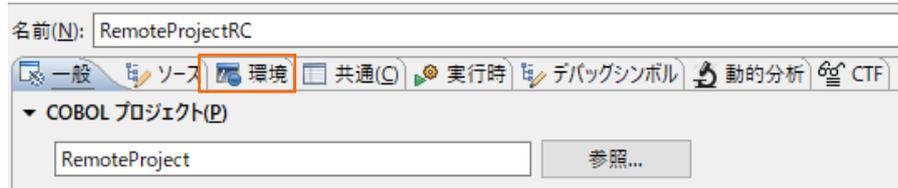
- ③ [名前] 欄及び [X サーバー(DISPLAY)] 欄へ値を設定します。



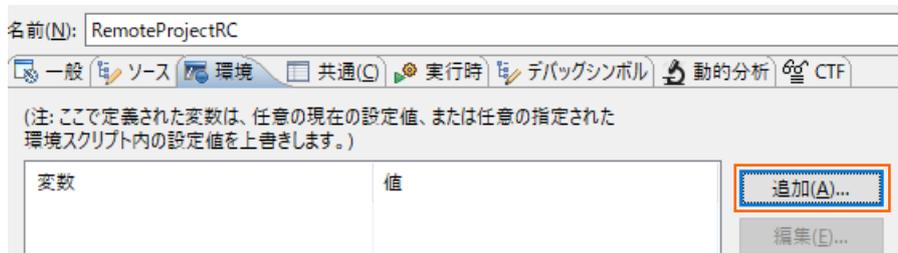
- ④ [適用(Y)] ボタンをクリックし変更を保存します。



- ⑤ [環境] タブをクリックします。



- ⑥ [追加(A)] ボタンをクリックします。



- ⑦ 下記のように入力し [OK] ボタンをクリックします。

変数 : dd_EMPSEQ

値 : Emp_Master.dat までのフルパス

環境変数を追加または変更します



変数:	dd_EMPSEQ
値:	/home/tut/workspace/RemoteProject/Emp_Master.dat

- ⑧ ⑥、⑦の要領で下記のエン트리も追加します。

変数 : dd_CNTLCARD

値 : Cntl_Card.dat までのフルパス

環境変数を追加または変更します



変数:	dd_CNTLCARD
値:	/home/tut/workspace/RemoteProject/Cntl_Card.dat

- ⑨ 更に同様に下記のエン트리も追加します。

変数 : dd_HIRERPT

値 : <プロジェクトディレクトリ>/Hire_Report.dat

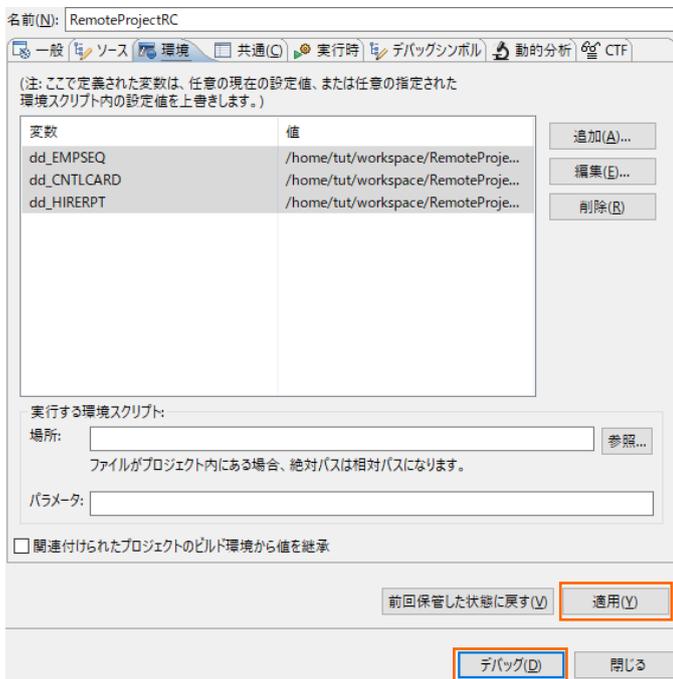
環境変数を追加または変更します



変数:	dd_HIRERPT
値:	/home/tut/workspace/RemoteProject/Hire_Report.dat

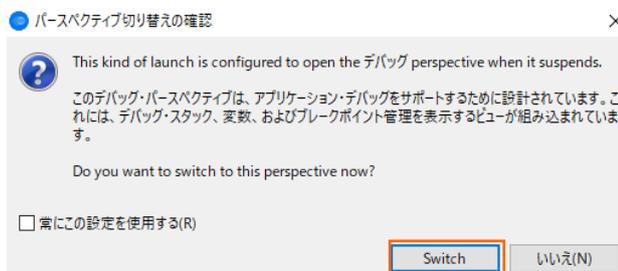
5) デバッグ実行を開始します。

前のステップで指定したデバッグ構成ウィンドウにて [適用(Y)] ボタンに続き [デバッグ(D)] をクリックしデバッグ実行を開始します。

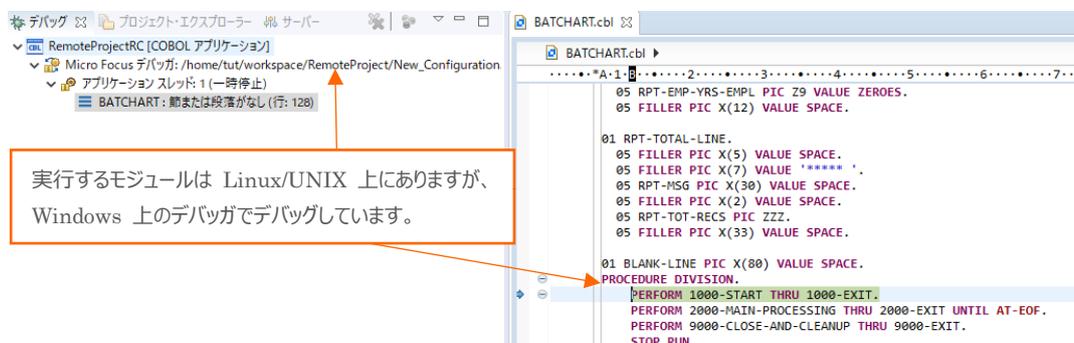


6) Eclipse 上のデバッガを使ってデバッグします。

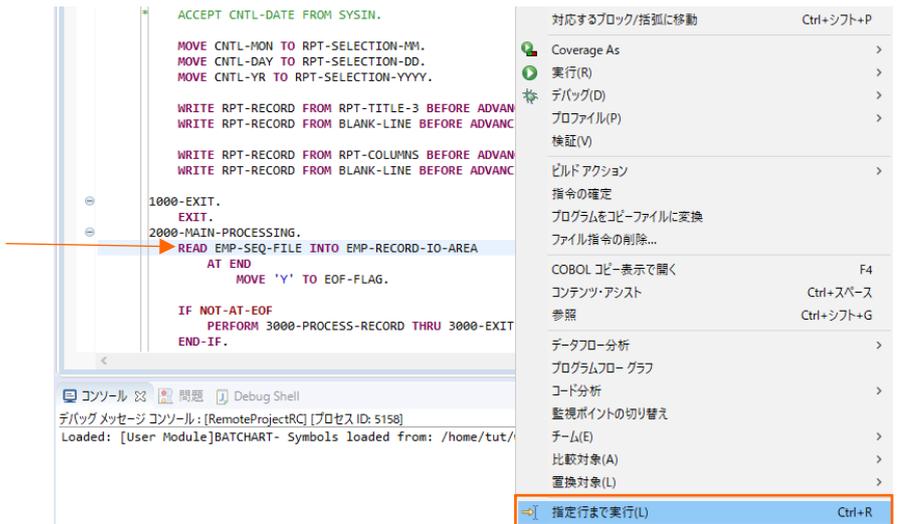
- ① パースペクティブの切り替えに関するメッセージに関しては [Switch] ボタンをクリックしてデバッグパースペクティブへ切り替えます。



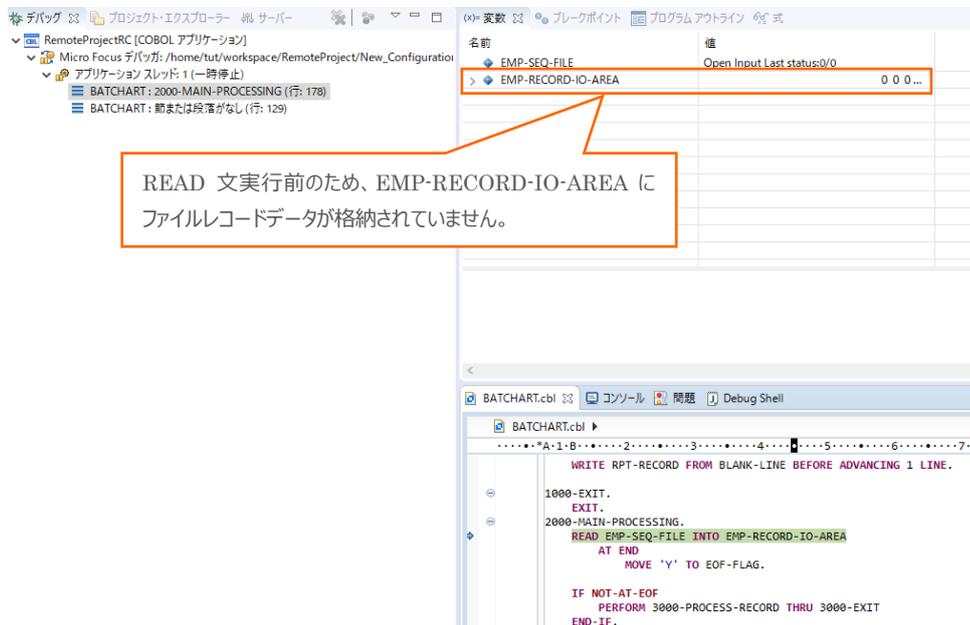
最初の COBOL 行の実行前で処理が一時停止しています。



- ② [2000-MAIN-PROCESSING] 段落の最初の READ 文にカーソルを合わせ、右クリックから [指定行まで実行(L)] を選択します。



カーソル位置まで処理が進みます。



③ F5を打鍵し、READ 文を実行します。



④ 条件付きブレークポイント機能を確認します。

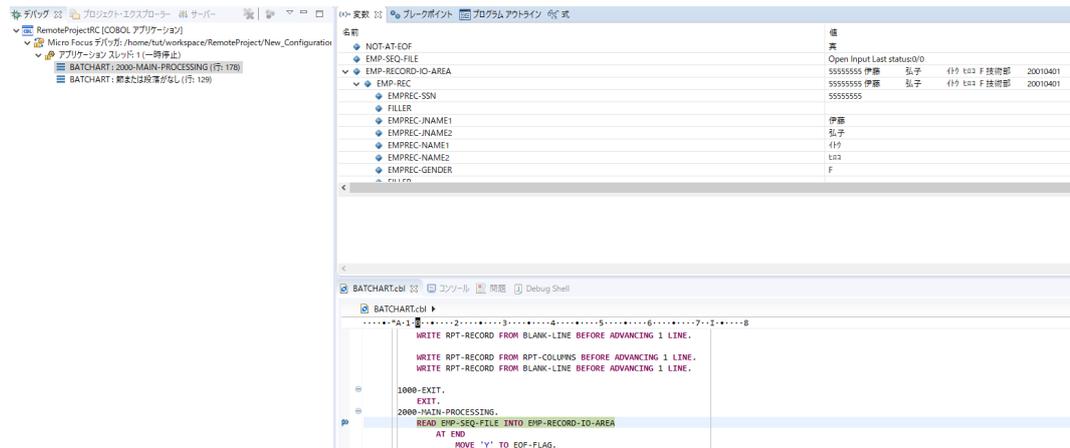
ダブルクリックをしてブレークポイントを追加。

ブレークポイントにカーソルを合わせ、右クリックから [ブレークポイントプロパティ(R)] を選択します。

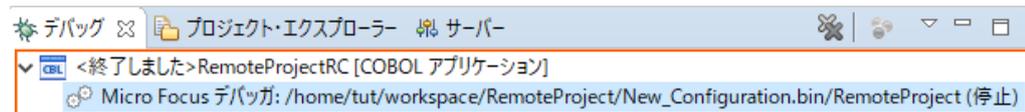
本例のように単純にヒットカウントで条件を付けることもできますし、変数を使った条件を指定することも可能です。

[Apply and Close] ボタンをクリックして、ヒットカウントによる条件付きブレークポイントを設定します。

設定後、F8 を打鍵しますと、設定した直後から 5 回目の READ 文のヒットでデバッガが一時停止します。



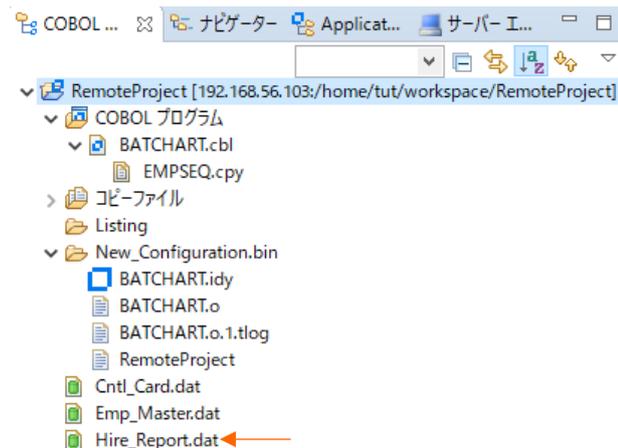
- ⑤ デバッガの動作が確認できましたら、F8 を打鍵しアプリケーションを最後まで実行します。
デバッガが終了した旨を [デバッグ] ビューより確認できます。



- 7) COBOL パースペクティブに戻します。
画面右上の COBOL パースペクティブアイコンを選択します。



- 8) 生成された帳票を確認します。
 - ① COBOL エクスプローラにて Hire_Report.dat が生成されていることを確認します。確認できない場合はプロジェクトを右クリックの上、[更新(F)] を選択し、ビューをリフレッシュします。



- ② COBOL エクスプローラ中の Hire_Report.dat を右クリックし、[アプリケーションから開く] > [テキストエディタ] を選択します。

「Micro Focus Visual COBOL for Eclipse 自習書」で確認したのと同じ帳票が生成されていることが確認できます⁶。

```

BATCHART.cbl  Hire_Report.dat
Program: BATCHRPT      Years Employed Report      10/16/2019
RemoteProject/BATCHART.cbl      15:19:54
***** 2011年 1月 1日以前に入社した社員一覧

部署名  社員名      社員番号  入社日   雇用年数
-----
営業部  佐藤 隆      1111111-3  04/01/1998  21
技術部  鈴木 尚之    2222222-6  10/15/1998  21
総務部  田中 直美    3333333-9  04/01/1999  20
営業部  山田 洋一    4444444-2  07/01/2000  19
技術部  伊藤 弘子    5555555-5  04/01/2001  18
営業部  木村 貴弘    6666666-8  12/20/2002  17
技術部  中村 慎司    7777777-1  04/01/2003  16
総務部  橋本 悦子    8888888-4  08/05/2004  15
営業部  三井 薫      9999999-7  04/01/2005  14

***** 処理レコード件数:          9

```

以上で本チュートリアルは完了です。

チュートリアルを終了する際、Eclipse はそのまま閉じていただいて構いません。

Linux/UNIX 側は Windows 側の Eclipse が終了した後に

```
$COBDIR/remotedev/stoprdo daemon
```

を実行しデーモンを終了させます。

WHAT'S NEXT

- 本チュートリアルで学習した技術の詳細については製品マニュアルをご参照ください。

免責事項

ここで紹介したソースコードは、機能説明のためのサンプルであり、製品の一部ではございません。ソースコードが実際に動作するか、御社業務に適合するかなどに関しまして、一切の保証はございません。ソースコード、説明、その他すべてについて、無謬性は保障されません。

ここで紹介するソースコードの一部、もしくは全部について、弊社に断りなく、御社の内部に組み込み、そのままご利用頂いても構いません。

本ソースコードの一部もしくは全部を二次的著作物に対して引用する場合、著作権法の精神に基づき、適切な扱いを行ってください。

⁶ Eclipse におけるデフォルトのテキストエディタフォントがプロポーショナルになっている場合は多少見た目が異なる可能性があります。この場合、テキストエディタ上で右クリックから [設定] を選択し [一般] > [外観] > [色とフォント] で表示されるページにてフォントを変更できます。